

武蔵野日曜集会

遣世者

――ヨハネ伝第12章37～50節――

1984年10月28日(武蔵野)

小池辰雄

キリストとの一対一の関係 わが避所^{さきどり} 心を頑固^{かたくな}にし給えり 原罪と現罪 医さるる事なからん為なり 被遣世者 審判は即、救いになる 超越的内在 キリストの中へ吸い込まれてしまいう 絶対的な救いのため

【ヨハネ12・37～50】

36 光の子とならんために光のある間に光を信ぜよ』イエス此等のことを語りてのち、彼らを避けて隠れ給えり。37 かく多くの徴を人々の前におこない給いたれど、なお彼を信ぜざりき。38 これ預言者イザヤの言の成就せん為なり。曰く『主よ、我らに聞きたる言を誰か信ぜし。主の御腕は誰に顕れし』39 彼らが信じ得ざりしは此の故なり。即ちイザヤまた云えらく、40 『彼らの眼を暗くし、心を頑固^{かたくな}にし給えり。これ目にて見、心にて悟り、翻えりて、我に医さるる事なからん為なり』41 イザヤの斯く云えるは、その栄光を見し故にて、イエスに就きて語りしなり。42 されど司^{つかさど}たちの中にもイエスを信じたるもの多かりしが、パリサイ人の故によりて言い顯すことを為ざりき、除名せられる事を恐れたるなり。43 彼らは神の誉^{ほまれ}よりも人の誉を愛^めでしなり。44 イエス呼わりて言い給う『われを信ずる者は我を信ずるにあらず、我を遣し給いし者を信じ、45 我を見る者は我を遣し給いし者を見るなり。46 我は光として世に來れり、すべて我を信ずる者の暗黒^{くらみ}に居らざらん為なり。47 人たとい我が言をききて守らずとも、我は之を審^{さば}かず。夫わが來りしは世を審かん為にあらず、世を救わん為なり。48 我を棄て、我が言を受けぬ者を審く者あり、わが語れる言こそ終の日に之を審くなれ。49 我はおのれに由りて語れるにあらず、我を遣し給いし父みずから我が言うべきこと、語るべきことを命じ給いし故なり。50 我その命令の永遠の生命たるを知る。されば我は語るに、我が父の我に言い給うまを語るなり』

●キリストとの一対一の関係

37節のちよつと前に、



36 光の子とならんために光のある間に光を信ぜよ』イエス此等のことを語り
てのち、彼らを避けて隠れ給えり。

とある。キリストは時々、「隠れる」というのは、みんなのいる所から独りになって祈るためです。キリストは一緒に祈る人がいませんから、いつも独りです。直弟子がいても、本当は祈れないんですよ、次元が違うものですから。聖霊を受けてないものですから。キリストの祈りというのは本当に父と我との一對一の、そういう場です。そういうことを思いましても、祈りの一番深いのは全く独りで祈るときです。東西古今の宗教家もみんな荒野とか深山幽谷で独りで瞑想したり祈ったりする。それで道が開けてくるんですから。みんなそうです。

だから、エクレシアという、召団とか教会とか、それはもちろん、

「二三人、わが名に在りて祈るときに私も一緒にいる」

という大事な在り方であります。人は決して単に孤独ではないわけです。けれども、西田哲学ではないけれども、個というものと多——あるいは、一と多——というものがある。人間の在り方というものはこの両面がなければダメなんです。個にしろ多にしろ、そこに絶対者が、神がある。我々にとってはキリストがある。

一番、基になるものは、この一對一の関係です。多はみんな、この中にこの一對一の「一」が集まっている。これはいい加減な多ではない。みんなこれは一對一が集まっている。こういう多が本当の多なんです。

「まあ大勢だから何とかならあ」

なんていう、そんな多はダメです。これは多でありながら一の自覚を持った多なんです。この個は一でありながら、多への弾力性を持っている。そういうのが即の関係なんです。

●わが避所^{おひしょ}

私は話していると、すぐ脱線するんですけれども、これはそういうように上からくるから脱線でも何でもない。「隠れたまえり」から、こういうことになってしまった。我々はキリストの中に隠れてしまう。一がキリストの中に隠れてしまう。

「汝はわが避所^{おひしょ}なり」

という。「避所」というのは素晴らしい言葉なんです。避所を持たない人は本当の宗教的な生活ができない。キリストの中に自分を投げ入れることをしなかったらね。ヘタすると、大勢で「ワッショイ、ワッショイ」というような教会だとか何とかがありますよね。それは決して単なる御神輿^{おみこし}ではないんだ。静かな深い世界です。とにかく私はその中に溶け込んでしまつて、無者です。

宗教哲学者、西谷啓治の『神と絶対無』という論文がある。素晴らしい論文です。私の言っているようなことを言っている。「無の光」なんてことを言っているんだ。驚いた。こない



だ私は無の光と言ったでしょ。彼は今、日本にいる一番深い宗教哲学者でしょうね。もちろんその前に西田幾多郎先生がいます。西田先生は向こう側に逝ってしまったけれども。天野先生も西田先生の影響を受けているね。天野先生のもものを読むと、ああだいたい西田先生が入っているなと思う。

皆さん、第一流のものを読まなくてダメですよ。いい加減なものはよしておく。まあ今の若い人たちが何を読んでいるかと言いたくなるね、正直。言葉の正しい意味における古典に親しまなくては。古典というのは、現代生きていても古典的な人がいますからね。田中美知太郎も古典的な人物だ。ギリシア哲学では第一任者です。私は中学のときに、中学の漢文の本に、

「すべからく第一等の書に親しむべし」

とかいう漢文があつて、非常に印象深かった。中学のときに、とにかく一流のものに、第一等のものにぶつかつていかなくてはいいかなと思つた。第一流のものにはすべてが入っている。文学であろうと、哲学であろうと、芸術であろうと。それが本当の意味で大衆を引き上げていく。大衆におもねつてはダメなんです。法律をやる人は、日本にもう少し法哲学者が出てきてもいいと思う。いわゆる法律学者ではダメだよ、法哲学をやらなければ。哲学的精神は、哲学、文学、宗教は離すことができない。その中にももちろん歴史も入ります。歴史を無視したらダメです。全部それを歴史的な認識において、歴史的構造において捉えることです。

「彼らを避けて隠れ給えり」

という。こういうところを読んでも、私はそういうことがグーッと来るんだよな。神さまの中に避けなくてはいかん。キリストの中に自分を入れていかなくてはいいかん。「信仰」なんていう言葉はもう、私は要らなくなつてしまった。「信じ仰ぐ」なんて。いつまでもそんな離れていてはダメだ、仰いでばかりいて。太陽も仰ぐのではない。

「心に太陽を持て」

という。日本の国旗は一番素晴らしい国旗なのに、なぜ、自分自身がその国旗にならないかと言う。魂の中に太陽が燃えてごらん。凄いことになるから。召国の人たちはもつと太陽のように燃えなくてはいかん。これがその、

「避けて隠れたまえり」

です。そうすると、キリストにはもの凄い力がくる。我もなく世もなしというところです。

●心を頑固にし給えり

³⁷ かく多くの徴を人々の前におこない給いたれど、なお彼を信ぜざりき。

「もう相手にならん」

と、キリストは。こんなに素晴らしい言葉を発し、徴が現われているのに、これを信じない、



受けとらない。

「何見ているか、何聞いているか」

ということになる。「彼を信ぜざりき」、受けとらなかったという。同じクリスチャンなんて言ったって、いい加減なクリスチャンがたくさんいるから。とにかく、御霊が来るまでは本ものではないんです。ウソとまでは言わないけれども。

³⁸これ預言者イザヤの言の成就せん為なり。

まあイザヤ書は凄い。キリストはイザヤ書が大好きだった。

曰く『主よ、我らに聞きたる言を誰か信ぜし。主の御腕は誰に顕れし』

これは有名なイザヤ書53章の始めの方です。

「われらが宣^{のぶ}るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれしや。²かれは主のまゑに芽^めえのごとく、燥^{かわ}きたる土よりいづる樹^こ株^{かぶ}のごとくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容^{すがた}なく、うつくしき貌^{かたち}はなく、われらがしたうべき艶^み色^{ばえ}なし。云々」(イザヤ53・1～2)

と。このイザヤ書53章は旧約の最高峰の、あるいは最も深いところですよ。

³⁹彼らが信じ得ざりしは此の故なり。即ちイザヤまた云えらく、⁴⁰『彼らの眼を暗くし、心を頑固^{かたくな}にし給えり。これ目にて見、心にて悟り、翻^{ひるが}えりて、

我に医^いさるる事なからん為なり』

こんな言葉は人間がしゃべれるような言葉ではないね。

「彼らの眼を暗くし、心を頑固^{かたくな}にし給えり」

という。

「では、神さまがしたのなら仕方がないじゃないか」

と、普通の平面論理ではそうなる。どうして、聖書はそういうことを言うんでしょうかね。眼を明るくして心を楽にしたらよさそうなのに、

「眼を暗くし、心を頑固にし給えり」

なんて。眼を暗くし心を頑固にする前に、人間の方で背いているんです。だから、いよいよ眼は暗くなるし、心は頑固になる。神さまの方では、もうこれは仕方がないと言ってほったらかす。そういうような角度の神の審判なんです、「眼を暗くし心を頑固にする」とは。そして行き詰まる。行き詰まって、今度はひっくり返る。ところが、ひっくり返らないのがたくさんいて困る。

人間は物体ではないから、「人格」というものは自由につくられている。どう思うが、何を言おうが、ご勝手なんだよな、自由というのは。けれども、この自由は、神の言を聞き神を見るような魂になる可能性と、神から背く可能性と、両方持っている。どっちでも勝手に選べるさかいと。これが人格として取り扱うことなんです。命令が出ても、命令に背く自由を持っている。アダム、イブはそれに背いてしまった。御言に背いた。



●原罪と現罪

何もアダム、イブばかりではない。原人、原の人という。我々は――現代人、今、現の人――同じことなんだ、現人も。同じ原人なんだ。アダム、イブの原罪なんて言うけれども、原罪は今度は、現の罪、現罪なんだ。「ゲン」という字を漢字で書くと、「原」と「現」になる。原罪と現罪。創世記と現代とは同じことなんだ。そういう真理がちゃんと、あの神話の中に我々のうちの現実のことがちゃんと言われている。

「あんなものは神話で、何になるか」

ではないんだよ。神話の形をもつて本当の現実の真理が語られているんです。聖書はそういうように読まなければダメです。

ところが、私が君たちみたいに青年のときは、無教会の先生方はあの神話をそのまま信じているような、いわゆる神話としてではなくて、そのまま何か真理のように、かの如くに受けとっているところがあつたね。だから、あとから「脱神話」なんてことが出てくるんですよ。脱神話と言って今度は全部、神話を否定するようなことだったら、その脱神話はまちがいないんだ。神話は神話で結構だ。しかし、神話におけるところの真理性は現実のことなんです。

だから、原人は、アダムもエバも、我々一人びとりがアダムでありエバである。それでその自由をいただいている。自由を、神さまの御言に従って動いていれば、これがパラダイスなんだ。ところが、これに背いてしまうものだから、これが地獄だとか煉獄だとかいう現実にしてしまった。ダンテが「地獄・煉獄・天国」を書いたのは、みんな現実の世界のひとつの表現と言ってもいい。だから、ダンテの『神曲』にはもの凄い真理性がある。あれは永遠の詩ですよ。素晴らしい。とてもかなわんね、大したもんだよ、ダンテというやつは。ゲートにしても。あの二人は超一流だ。

そういう自由に背いてしまったから、

「それではもつと暗くしてやろう、もつと頑なにしてやろう」

と、神さまの方から審判が来てしまった。そして、本当に暗くなつて、本当にどうにもならなくなると、今度は仕方がないから、眼が覚まされる。パウロ(サウロ)がそうなんだ。頑なな権化なんだ、サウロは。そして、キリストに逆らっている。ところが、キリストがダマスコ途上でサウロを撃った。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか」

と。天来の光が来てしまった。彼は暗いのに明るいと思っていた。本当は真つ暗なんだ。それで眼が覚めた。

「わが眼より鱗の如きもの落ちたり」
というわけだ。



●「医さるる事なからん為なり」

40 『彼らの眼を暗くし、心を頑固にし給えり。これ目にて見、心にて悟り、翻えりて、我に医さるる事なからん為なり』

と。

「医さるる事なからん為なり」

「ダメになつてしまつたためだ」

と。これは審判です。イザヤ書は凄い。それで、今でもユダヤ人はこの言葉の通りにキリストを否んでいる。イザヤ書にこんなことが書いてあるのに、ユダヤ人というのはそれでもまだ解らない。パウロがあればほど律法の人だったのが、

「律法ではないんだ。キリストの恵みなんだ」

と言って、パウロくらい鮮やかなひっくり返しをした人はない。パウロは最大のチャンピオンですよ。キリストをぬいてはもうパウロの右に出づる者はないです、霊的な世界ではその鮮やかなひっくり返しをしているのに、ユダヤ人は

「パウロは間違つた」

なんてあいかわらず言っている。どっちが間違っているか。

41 イザヤの斯く云えるは、その栄光を見し故にて、イエスに就きて語りしなり。

逆説的な言い方をしている。ところが、このイエスが現われても、栄光が現われても、みんなはそれを受けとらない。いよいよ頑なにしまつて、

「これ信ぜざらんがためなり」とイザヤが言っている通りではないか。やっぱり、イ

ザヤ書の預言は成就している」

と、ヨハネが言っているわけです。こんな預言が成就されては本当は困るんだ。

42 されど司たちの中にもイエスを信じたるもの多かりしが、パリサイ人の故によりて言い顯すことを為ざりき、除名せられる事を恐れたるなり。

シナゴグのいわゆる教会員からはずされる。破門されることを恐れて黙っている。情けないやつらだ。パリサイなんかには破門された方がいんだけど。それくらいパリサイというのはおっかなびっくりだったらしいね、この頃は。第一、パリサイのチャンピオンがパウロなんだから。

43 彼らは神の誉よりも人の誉を愛でしなり。

即ち、「キリストの仰っていることはどうもそうらしいけれども」なんて言つて引つ込み思案になっている。それは人の誉れを求めて神の誉れからはズレてしまつている話なんだと。

●被遣世者

44 イエス呼わりて言い給う『われを信する者は我を信するにあらず、我を遣し給いし者を信じ、⁴⁵ 我を見る者は我を遣し給いし者を見るなり。』



44節、45節のキリストの自覚はどうですか。だから、私は今日こういう題を出したんです。「遣世者^{けんせい}」と。遣隋使とか遣唐使とかあったでしょ。隋に遣わされた者、唐に遣わされた者。これは本当は「被」がいるんだ。「被遣世者」なんだ。世に遣わされた者。「遣世使」でもいいよ。キリストは遣世者なんだ。神さまから遣わされた者です。

「私を信じたって、私ではないよ。それは神さまを信じていることなんだ。私を見てたって、私を見ているのではない。神さまを見ているんだ」

と。だから、キリストは神さまを隠れ蓑^みにしているようなわけだ。キリストは神さまの中に隠れている。神を隠れ蓑にしているようなひとだ、キリストというひとは。私はキリストを隠れ蓑にしている。皆さんもそうだろう。

「私を見た者はキリストを見ているんだ」

と、クリスチャンは本当はそれが言えなくてはいかん。

「この破れ器から光っているキリストが見えないか」ということです。

「汝を洗わずば、我なんじと関わりなし」

とキリストが言われたでしょ。私はキリストに洗われた者だから、キリストの恩寵の関わりの中にあるんだから、それがはつきり言えるんです。蓑虫^みみたいだ。外側は木の葉や木くずや何かできていて、これが何が体かという。中に隠れている。蓑虫というやつはおもしろいね。何か木くずかと思って、敵が寄ってこないんだ。ところが、どっこい中に隠れている。

だから、キリストは

「私を見た者は、私を信じた者は、私を信じているのではないぞ」

と言うんだ。

「私はキリストを信じています」

なんて言っても、

「それは神さまを信じているんだよ」

と、逆にキリストに言われてしまうんだ。けれども、それは即だからね。即の世界なんだ。イエスというひとは即、神なんだから。キリストを信ずるのは即、神を信ずる。

無なるがゆえに光っている。だから、「無の光」と言うんです。光無きがゆえに光っていると言うんだ、逆に言う。キリストには光が無い。本当に無いからもの凄い光が光っている。そうですよ、「無の光」というのはそういうことです。これはお釈迦さんとキリストしか本当にはできなかった。

こないだの私のソネットはそういうことです。あのソネットを西谷さんに送ってやろうかな。これはもう何とも説明のできない世界です。もういわゆる「キリスト教」からは私は本当に抜けました。ですから、どうしてもこれは表現しなければならぬ。



「⁴⁴イエス呼わりて言い給う『われを信する者は我を信するにあらず、我を遣し給いし者を信じ、⁴⁵我を見る者は我を遣し給いし者を見るなり。』」

と。神を見ているんだ。

「恵福^{さいわい}なるかな、キリストを見る者、そは神を見るなり」

と。そういうことです。そういうキリストが本当の無^む的^{てき}実^{じつ}存^{ぞん}者^{しや}なんです。それが本当の無^む的^{てき}実^{じつ}存^{ぞん}。遣^{はな}わ^たせ^はれた^る者^{しや}、それが本当の無^む的^{てき}実^{じつ}存^{ぞん}だ。京都の人が、

「小池先生から最初に聞いた講演は『無^む的^{てき}実^{じつ}存^{ぞん}』という講演でした」

と言う。昔も今も、アルファにしてオメガです。今度の京都の黙示録の講義はどんなことになるかね。全部、異言で語るかもしれない。

●審判は即、救いになる

⁴⁶我は光として世に來れり、

「我は光なり。世に來たれり」

と。ギリシア語では、「われ光、世に來たれり」と非常に簡単な言い方をしている。

すべて我を信する者の暗黒^{くら}に居^ゐら^ざらん^をなり。

と。

「言は即ち光であつた」

と、ヨハネ伝の一番先に出てくる。宗教では、光という言葉は方々に他の宗教でも出てくる。

ゲーテも、

「太陽とキリストには無条件に頭を下げる」

と言った。光の存在だから。普通の人は何でもないと思つてゐるものに驚嘆驚倒するようなのが本当の世界、本当の在り方なんです。リングが木から落ちるのは何でもないはなしだ。それに非常に不思議がつて、何だろうかというのがニュートンではないですか。

⁴⁷人たとい我が言をききて守らずとも、我は之を審^{それ}かず。夫^そわが來りしは世を審かん為にあらず、世を救わん為なり。

キリストの言葉は矛盾しますよ、時々。

「我は審かんために來た」

という言葉が別にありますけれども。本当の究極の意味は、審判は即、救いになるんです。審かなければ、救いは來ない。義が即、愛というのはそのことです。義は審きますよ。けれども、その審きは、義を与えることによつて愛になつてしまふんです。世を審いてしまつたら、おしまいだよね。みんな滅びてしまふ。ところが、この審判は自分で引き受けて、これを救わんとしているんだけど、それを受けとらないで、審判を欲するかの如くに自ら審判を招くのが、人間の欲なんです。それがついには戦争ということになる。戦争は自らを滅びへと審いている。



軍縮だとか言つて、ソ連とアメリカでもつてガタガタ、ガタガタ、らちがあかないことを言っている。もう原爆が多すぎてしまつて、何万個という原爆でもつて、これを棄てようもないし、どうしようもないんだ。

ヘーゲルは世界の歴史における理性というものを非常に強調したけれども、その尊い理性でもどうにもならないということです。人間の世界は理性で歴史がどうかなるならば、ヘーゲルの歴史哲学は素晴らしい構造を持つていけるけれども、それは結局大きな樂觀主義になっている。相対的には義は勝ちます。不義は滅びます。けれども、それにもかかわらず、不義が勝つて、世界が滅びにいくことは黙示録が預言しているとおりです。キリストの十字架は要らなくてはならない。人間というのは、キリストの十字架は歴史の終りまで厳然として、なければどうにもならない。救いを必要としない人は一人もない。

「救」という字はおもしろい字です。「求^{もと}めるといふ字と「戈^{ほこ}」「咎^{むち}」という字からなっている。「戈や咎でもつて敵をやつつけてください」

と言つて求めているのが「救」という字なんだそう。その相手はサタンなんだ。聖書的に解釈すれば、

「サタンをやつつけてくだされば救われます」
と、そういうことなんだ。

「世を救わんためなり」

と。我々は救われたる者、贖^{あがな}われたる者。もう、救いは既に十字架と聖霊で成っている。十字架は二千年前に一回きた。ヘブル書に書いてあるとおり。

「キリストは……己^{おの}が血をもて只一たび至聖所に入りて、永遠^{とこ}の贖罪を終えたまへり。」(ヘブル9・11～12)

という。完了している。過去完了を現在完了として受けとればいい。そして、聖霊は現在です。聖霊は永遠の現在です。現在完了の土台にくるものは現在なんです。こういう構造になつていなければダメなんだ、クリスチャンとしては。

●超越的内在

⁴⁸我を棄て、我が言を受けぬ者を審く者あり、わが語れる言こそ終の日に之を審くなれ。

わが言葉を受けぬ者を審く。救うために来るけれども、「我を棄て、我が言を受けぬ者」は、それは審く。

「わが語れる言こそ終の日に之を審く」

と。救いの言葉が逆に今度は、審きの言葉になつてしまふんだ。困つたもんだね。要するに、こっち側の受け方の在り方による。救われるのも救われないのも、こちらの在り方次第。それが自由なんだ。恐ろしいよ、この自由というのは。自由は必ずその反面に責任がある。「言



論の自由」なんて勝手なことを言っているけれども、その発する言葉には責任がある。本当は、無責任なことは言えないんだ。

もう少しカント哲学を勉強するといいいね、今の若い人は。カントの『実践理性批判』は読まなければダメです。何といっても、ソクラテス、プラトン、アリストテレスは大変なものだ。哲学のすべてがこの中に入っていると言ってもいいくらいだ。それからいろんな哲学のたくさん流れがあつて、これがカントに流れ入った。また、カントから出ていうわけだ。それくらいでつかいんだ、カントというひとは。カント、ヘーゲル、フイヒテ、シェリング。この四人はドイツ哲学の大変なものだ。シェリングというのは芸術的な感覚も非常にあつた人です。

49 我はおのれに由りて語れるにあらず、我を遣し給いし父みずから我が言うべきこと、語るべきことを命じ給いし故なり。

自分の言葉は自分のものでないと、これはしょっちゅうキリストが言っている。ここにも「遣わし給いし」とある。キリストは遣世者、世に遣わされたる者。

「言うべきこと、語るべきことはみんな神さまから来ているんだ」

と。超越の世界が内在にならないといけない。「超越的内在」という言葉もある。神は超越していらつしやる方。天界にあるキリストは超越者である。それが我々の中に聖霊として内在しなければならぬ。内在的超越と言つても、超越的内在と言つてもいいですけども。とにかく、内在というところに来なかつたら、すべて本ものにならない。内在、一如の世界です。

「先生は超越の世界に入っているらしいが、まだこっちは」

なんて、「まだこっちは」じゃないですよ。一緒に入つていかななくては。

50 我その命令の永遠の生命たるを知る。

おもしろね、これは。「命令が永遠の生命だ」と。あの「トーラー」という「律法」という字ももともとは「指図」という字なんです。

「こうしろ、ああしろ」

と指図している。ところが、命令が生命だと言う。だから、律法であろうと預言であろうと全部、キリストにおいては神さまの言葉は生命になっている。我々もキリストの言葉は全部、生命として受けとらなければダメです。

「わが言は霊なり、生命なり」

と仰つたのがそのこと。

「本当の霊であるから生命だよ」

ということなんです、逆に言うとな。ヨハネ伝6章。

されば我は語るに、我が父の我に言い給うまを語るなり』

そのまま語っている。何も色をつけてない。神さまの仰る通りに私は言っているんだと。



もう本当にキリストというひとは神の懷の中に入って、我が神だか、神が我だかわからない。

「南無と言えば阿弥陀きにけり一つ身を我とやいわん仏とやいわん」

という言葉があるじゃないですか。「南無阿弥陀仏」の「南無」と言えば阿弥陀さんがやって来た。この一つ身を我と言おうか仏と言おうかわからん。仏と我とは一つだと。あれと同じ境地ですよ。南無阿弥陀仏と言えば、直ちに阿弥陀がやって来る。南無妙法蓮華経と言えば直ちに、妙法である蓮華経がやって来る。華嚴経とか法華経だとか、ああいうものも私は少し勉強したいと思っっているんだけど。

●キリストの中へ吸い込まれてしまう

キリストは遣わされたる者。我々もまたキリストに遣わされたる者です。キリストは神さまに遣わされたる者で、我々はキリストに遣わされたる者です。そういう構造になっている。キリストがなったときに、具体的にこれだけのことをなさって、

「聖書は我につきて証しするものなり」

という。聖書においてキリストが我々を遣わしている言葉と行為が満ち満ちているからね。それを実存しなければダメです。実存でも実践でもいい。これも、「しなければならぬ」ではない。「せざるを得ない」んです。キリストの中に本当に実存せざるを得ない。遣わされたる者はキリストから出てくるんだからね。キリストは神さまから遣わされている。我々はキリストの中にまず入って、それからキリストから出てきたときに、初めて遣わされたる者です。中に入らなければ、遣わされたる者なんて意味をなさいませんよ。いいですか。そして、ここに出てくるのが即ち、実践であり実存なんです。「サブジェクト」です。自分を投げ出す。投下するんです。「サブジェクト」というのは「投下」という意味です。まず中にはいること。

「汝らを引き寄せるためなり」

と書いてあったでしょ

「我は天界に往くと、お前たちを引き寄せるぞ」

と。入ったと思ったら、実は入ったのではない。キリストの力で引き寄せられて、入れられてしまったんだ。キリストの中へ吸い込まれてしまった。それはキリストの恵みが、その光が、その生命が私たちを圧倒する。だから、その中に入れられてしまうんだ。それから、そこから出てくる。ルターが『クリスチャンの自由』の終りの方の第30節で

「天にのぼってまた下りてきてどうのこうの」

と、言っているのはこれと同じ境地です。

『クリスチャンの自由』もそのうちに訳しますけれども。まあ、「そのうちに」なんて言ったって、いつか「そのうちに」だかね。いろんなことがたくさんあって、第七巻まで出したけれども、さあ来年から八巻から出るか出ないかわからない。この『旧約と新約』はたくさんある。



あそこに録音テープがいっぱいあるから、これはあなた方に宿題にしておこう。先生が向こう側にいつてから、徐々にリールを回して――これだけ私の話を聞いていけば、私の文章を書けると思う――適当にまとめてくださいよ。あの「原始福音」は手島さんのそれをやっているよ。彼らは、ああいうことをやることはなかなかうまいね。これをみんなしてくださいと言っているのではないですよ。その中から選んで、ああこれは是非ともというやつを手分けしてやってください。そんなことはまあ半分お願いで、半分どうでもいいということですけども。

だから、『旧約と新約』は第十一巻と十二巻にしておもうかな。はは、相変わらず、しょっちゅう変わっているんだ、私の言うことは。そして、第八巻は『随想集』か『詩歌集』くらいにしておいて。

「また先生はまた変わるかもしれない」

なんて。ちょうど春夏秋冬みたいに変わる。とにかく、第一義のことをこれからやっていきますから、仕方がない。

キリストがいかに神さまの中に隠れ在るひとであるか。隠れ在っているから、キリストは正に神さまの中にしょっちゅう入ってしまうから、そこから出てきている。業も言葉も全部、これは遣わされたる者の業であり、遣わされたる者の言葉である。自分で勝手に勝手にものを言っているのではない。ところが、この遣わされたる者の言葉が絶対者からの言葉だから、これが絶対自由の言葉なんです。また絶対自由の行動であるわけです。何ものにも依存しない。神さまだけに依存するということは、本当の自由なんです。キリストにだけに依存するということが本当の自由です。自分がないということは、絶対な者が展開するということだから、こんな素晴らしい自由はないじゃないですか。小さな自己の自由ではないんだ。そんな自由は普通の人は知らないですよ。天衣無縫の世界です。

もうこういう福音になったら、勝負ありですよ。ああ、何でも読めるです、この福音の境地に入ったら。仏教であろうと何教であろうと。それが偽りのものでなくて本ものなら、ちゃんとそれを消化できる。まあなんとこの福音というものは驚くべきものかと。

「その長さ高さ広さ深さのいかに量りしれない」

とパウロが驚嘆して言っているでしょ。パウロはその世界に入っているからね。ヨハネの表現は別だけれども、やはり同じ世界に入っている。ペテロもそうですよ。ただペテロは表現の上ではそれほど豊かではなかったけれども、現実はどうです。

●絶対的な救いのため

ローマ書11章を開いてください。なぜ、イスラエル人が頑なにされてしまったかという順序がある。

「お前たちはしばらく頑なにしておくぞ。お前たちは頑なな民だから、もう少し柔



らかい異邦人の方に先に福音がいつてしまう。そして最後に今度は、イスラエルが救われる時がくる。その時は世界の終りだ」

ということパウロがローマ書11章で言っている。本当は9章からずっと読むといいけれども。11章13節から、

「¹³われ異邦人なる汝等という、我は異邦人の使徒たるによりて己が職を重んず。¹⁴これ或は我が骨肉の者を励まし、その中に幾許かを救わん為なり。¹⁵もし彼らの棄てらるること世の和平となりたらんには、その受け納らるるは、死人の中より活くると等しからずや。¹⁶もし初穂の粉潔くば、パンの団塊も潔く、樹の根潔くば、その枝も潔からん。¹⁷若しオリブの幾許の枝きり落とされて、野のオリブなる汝その中に接がれ、共にその樹の液汁ある根に与らば、¹⁸かの枝に対して誇るな、たとい誇るとも汝は根を支えず、根は反つて汝を支うるなり。¹⁹なんじ或は言わん『枝の折られしは我が接がれん為なり』と。²⁰実に然り、彼らは不信によりて折られ、汝は信仰によりて立てるなり、高ぶりたる思をもたず、反つて懼れよ。²¹もし神、原樹の枝を惜しみ給わざりしならば、汝をも惜しみ給わじ。²²神の仁慈と、その厳肅を見よ、厳肅は倒れし者にあり、仁慈はその仁慈に止まる汝にあり、若しその仁慈に止まらずば、汝も切り取らるべし。」(ロマ11・13～22)

木があつて枝がある。イスラエルはもともと選びの木なんだ。ところが、キリストを受けとらない枝は切られてしまった。そして、別にこれに接ぎ木した。これが異邦人なんです。

「異邦人は接ぎ木されて榮えていく。しかし、この元はこちらにあるんだ。元に対しては誇るわけにいかんぞ。枝は切られはしたけれども、これはもともと元があるんだから、この元が本当に神さまを受けとるような枝となつたときに、救いは全うされるんだ。接ぎ木の枝なる異邦人と、それからユダヤ人と、これが全うされるときには本当の最後のときなんだが

しかし、それも樂觀的には言えないです、

その時を待っている」

と、これがパウロの歴史哲学である。異邦人の数が満つると、救われた人の数が満つると、ユダヤ人が今度は最後に悔い改める。それを待っているんだと。ユダヤ人の中にもキリスト教に変わっている人ももちろんありますけれども、何しろキリストを否んだ連中だから、驚くべきキリストを生み出していながら、それを否んで十字架にかけてしまった。しかし、11章32節に、

「³²神は凡ての人を憐まんとために凡ての人を不順の中に取籠め給いたり。という恐ろしい言葉がある。

³³ああ神の智慧と知識との富は深いかな、その審判は測り難く、その途は尋



ね難し。」(ロマ11・32～33)

「^{すべ}凡ての人を憐まんとために凡ての人を不順の中にとじこめた」

という。万人は罪びとだ。これは万人救済のためなんだと。だから要するに、棄てるも棄てないも相対的なことなんです。根本的にはみんな神に背いている。みんな救いを要する。これが「不順の中にとじこめた」ということです。妙な言い方をするけれども。それは、人間の相対的な現実を神さまの方の違った次元から見ると、神さまはそうしたんだぞという言い方になる。平面論理では解らないでしょ。それは今度は、

「絶対的な救いのためなんだぞ、相対的な救いではないんだぞ」

と。万人救済の本願を持っている。だけれども、その本願を受けとらなければそれだけの話だ。それが第二の死になる。第二の死となったら恐ろしい。

ローマ書9章からあとは、パウロが本当に

「ユダヤ人のためには、同胞のためにはキリストに棄てられても」

と言って、それほどにまで同胞の人たちが悔い改めを、キリストへの立ち帰りを、神さまへの立ち帰りを、彼は本当に涙をもつて願った。自分がひっくり返されたから。

「お前たちも帰れ。そのためには私はキリストに呪われてもいい。なんて頑なな野

郎か」

と。頑なな権化が頑なを絶対否定したわけです。強烈な人格というものは非常にそういったもの凄い絶対矛盾の自己同一的構造を持っている。内村先生もそれに近い。手島さんもちよつとそういう角度の人間だった。明暗が非常にはつきりしている。ルターもそうだな。大体ああいう連中がそうだ。だから、独房でぶっ倒れたりするんだ、ルターは。もう少し置いておいたら死んでしまうところだった。

要するに、キリストの中に飛び込んで、私たちは世に遣わされたる者としてあるということ。我々は一人びとりが伝道者です。皆さんはそこらを歩くときに、『エン・クリスト』をカバンなりハンドバッグの中に入れておきなさいよ。

「どうぞ、これを読んでごらんなさい」

と。いいんですよ、無駄になつても。

「ああ、この人に何とかして伝えたいな」

と思つたら。実践しなければダメですよ、本当に。

